

小川未明の雲

小 埜 裕 二

一、詩碑「雲の如く」

昭和三十一年一月一七日、小川未明が一五歳頃から二〇歳頃まで住んだ春日山神社境内（新潟県上越市）において、詩碑の除幕式が行われ、未明自身も不自由な体を親族に支えられながら出席した。未明七四歳のときのことである。發起人は未明のふるさと高田の町の有志による「小川未明詩碑建設の会」であった¹。詩碑には、未明自身の筆跡どおり、次のように刻まれた。

雲の如く 高く

くものごとく かがやき

雲のごとく とらわれず

この詩碑は、文学者として生涯を貫いた未明の信念が見事に刻まれたものといえよう。未明の志の高さ、情熱、不動の信念が、雲の様子を通して表されている²。未明文学には、周知のとおり雲がたびたび登場する。一人子であった未明は子供時代から自然に親しみ、また一家で移り住んだ春日山の周辺に住む人がなかつたことから、自然と向き合わざるをえなかつた。頸城平野をはるかに見渡すことのできる春日山のいただき近く、自宅となった春日山神社の境内からは日本海が見えた。春日山移住によって、

未明自身の目が、自ずと雲の高さに引き上げられていたことは注目に値する。

私は、敵に鹽を贈った上杉謙信を崇拜して、神社を建てた父の影響を受け、塾へいつても、日本外史を泣いて教える先生の薫陶を受けました。私も楠正成が正行と別れる條りなどでは、泣いたものです。ですから小説を書くのも世道人心のために筆を執らなければならぬ、と考えておりました。それだけに私は貧富の懸隔の激しいのを見て、これぞよいのかと思つたのです。

未明は「童話を作つて五十年」（「文芸春秋」昭和二六年二月）³で右のように述べている。「世道人心のために筆を執らなければならぬ」と考える未明の志の高さの大半は、故郷高田での家庭環境や歴史的文化的影響、そして衰微していく城下町に生じた「貧富の懸隔」を見てきたことから形成された。未明は、人道のために、弱者のために叫ぶことができるのは「現代の科学的文明に反抗する熱烈な詩人」だけだと言う⁴。未明のいう「詩人」とは、人道や弱者のために社会を変えていく情熱をもった者のことをいう。未明は自身の信ずるところに従つて、生涯、節をまげなかつた。未明は、子供の目でものを見、子供の心でものを感じることに、それは何にもまして正しく、価値のあることだという信念をもつていた。人のためにつ

くす気持ち、ひろく愛する心、善いものや美しいものに憧れる気持ち、悪を憎む心、正義に味方する心、そうした純情の世界を生きる力の人々に与えようとした。そして、そうした純情の世界の伸長を拒み、歪ませる資本主義社会と戦いつづけた。五〇年以上にわたる未明の創作時期は、日本の近代社会が大きく変化する時期と重なる。人間性を守ることにいてぶれることなく、未明は自身の信念に従い、ネオ・ロマンチズムや社会主義、全体主義に身をゆだねることを恐れなかった。

雲は空気中の水分が凝結したものが群れ集まって空中を浮遊したものであるが、雲の位置や形状などから比喩的用法が生まれた。『大辞林 第三版』によると、⑦身分・地位がはるかに高いことのとえ、①一面にひろがったり、たなびいたりしているもののとえ、②気持ちや表情などの晴れ晴れしないことのとえ、④（火葬の煙を雲に見立てて）死ぬことのとえ、と説明されている。慣用句に目を向けると、「雲衝く」は非常に背が高いさまのとえであり、「雲にかけ橋」はかないそうもない分不相応な望みを言う。「雲を霞」はいっさんに走って姿を隠してしまうこと、「雲を掴むよう」は物事が漠然としていて、とらえどころのないさまをいう。

雲は、空を行き来するものであることから、青空や太陽を隠すものとなり、それ自身で何かを顕すものとなったりする。雲の色によって、明るい希望を表す場合もあれば、黒雲のように暗いある種の予感を表す場合もある。注目されるのは「雲水」の言葉で表される雲の使われ方である。飛び行く雲と流れる水は、行方が定まらないところから諸国を巡る行脚僧を指すことが多い。雲は悠然と浮かび、とどまるところを知らない。水も同様である。一方、空を行く雲、川を流れる水は一時も同じ状態ではない。その意味で、行雲流水は、鴨長明『方丈記』の周知の冒頭「ゆく川の流れば絶えずして、しかも、もとの水にあらず。」のように、世の無常を表わす語としても用いられる。

未明にとって雲は、どのような意味をもっていたのか。言うまでもなく、雲は、風や林、火や山と置き換えて言い表すこともできる。同様に、太陽

や月、水や木、花によつてたとえることも可能である。未明文学の形成に大きな影響を与えた雪も同じである。そのなかで未明は、詩碑の言葉に、雲を選んだ。しかし、未明文学をひもとくと、〈雲の作家〉と呼んでよいほどに、未明が好んで雲を作品に登場させていたことが分かる。

未明はカタカナ童話「雲、雲、イロイロナ雲」「コトモアサヒ」昭和五年七月)で、次のように述べている。

私ハ、雲ヲ見ルノガ、ダイスキデス。ソシテ、ウツクシイバカリデナク、フシギナカンジガシマス。雲ハ、ナニモカンガヘナイデ、ウゴイテキルノデセウ。

イマ見タトオモツタ雲ガ、モウ、アトカタモナクキエテキマス。ナント、自然ハ、オホキイデハアリマセンカ。

「私」は雲を見るのが大好きだという。美しいばかりでなく、不思議な感じがするという。雲はなにも考えないで動いている。見えていた雲があとかたもなく消えてしまうのを見て、自然の偉大さに感嘆している。こうした雲への讃仰が、詩碑の背景には流れている。子供時代の未明は空を見上げ、姿かたちを大胆に、しかも融通無碍に変える、雲の消長に目をみはつたのであろう。

しかし、次の未明の詩に登場する雲は、どうであろうか。『詩集あの山越えて』(大正三年一月、尚栄堂)に「白雲」という詩が収められている。この詩の雲は、「寂しさうな白雲」「恋もなく、愁へもなく、独りあてなく寂しさうに迷うてゐる白雲」「柔順さうな孤独の白雲」と表される。「白雲」は「恵み深ひ、涙を湛へてゐるやうな緑色の空」を慕って舞い上がるか、「他に憧る、故郷があつて」漂うかするものである。雲は、より所を失った、心細く頼りないものの象徴として登場する。この詩の雲には、詩碑のような意味はない。もう一編の詩「黄色な雲」には、「山の西に沈む」「厭らしい黄色な幅広い一筋の雲が、くつきりと灰色の空に浮き出てゐた。」とあ

り、その雲は「尼さんが厭らしい眼付で、此方を覗いて、笑つてゐるやうに思つた」と表現されている。この雲を見たのは、「北の冬」の「子供の時分」であつたという。北国らしい、暗く妖しい雰囲気をかもしだす雲である。この詩の雲にも詩碑の意味はない。

さらに、次のような雲の使い方も注目される。

道遠くして日は傾けり 独り草原に座して 火雲の乱舞を見る

(未明扇面)。

この詩句がいつ書かれたのかは不明である。人生の長い行路を経て、いまだ理想を実現するにはいたらぬ。残された人生の時間はわずかである。そういう思いを抱きつつ、草原に座し、目の前の壮麗な夕焼け雲の乱舞を見るといふのである。ここには自然のいとよみの永遠性と人間のいとなみの有限性が対比されている。壮大な自然の美に見とれ、あるいは諦念しつつも、残された人生の時を燃えつくしたいとひそかに願う未明の思いが読み取れる。このように考えるなら、詩碑の句も「道遠くして日は傾けり」といった人生のおわりに、未明が願つた「火雲の乱舞」のような生き方を表したものと読める。「雲、雲、イロイロナ雲」の自然の偉大さへの憧れも、人間の有限性に対する悲しみと表裏一体であろう。未明の雲は、喜びと悲しみの両極の感情を引き起こすものとしてある。

未明は自然と人事を対比的にとらえる作家であつた。人間の生が有限ではかないものであるからこそ、雲に憧れ、短い一生を輝いて生きたいと願つた。春日山に詩碑を建立するにあつて、「雲の如く」と詩句を書き起こした未明の脳裏には、雲にまつわる未明自身のさまざまな感情がよぎつたに違いない。本稿では、以下、詩句の背後に裏打ちされた、あるいは投影された雲の意味について、いくつか具体例を引きながら考えてみたい。

二、ふるさとを懐かしむ雲、白い雲

「眠つてゐるやうな北国の町」(「文章倶楽部」大正一〇年一月)において未明は、次のように述べている。

故郷といふ言葉、その言葉がすでに、ローマンチックの意味を含んでゐる。多くの詩人の中には、その故郷の自然、若しくは人情を歌ふこと以外に、詩は作らなかつたやうな郷土芸術家がある。これを見ても、如何に故郷に魅力があるかといふことがわかる。

私が東京に来て、文学へ志し、小説を書いた時分には、多くはこの故郷に対する思慕の情であつた。(中略)

私はオーズオースではないが、子供の時分の自然は皆、輝きを持つてゐたといふが、本当にさうであつたと思ふ。これは私が自然に対する懐かしみである。

この観点から「雲」が捉えられた小説に、たとえば「ふる郷」(「読売新聞」明治三七年九月二五日、一〇月九、一六日)がある。漂浪の身の「私」は、幼い頃のことを思う。常に故郷を思い、母を思つてきたと言ひ、「あ、なつかしい故郷! 藁葺屋根の頂を、白い、軽い、円い雲がふはふはと飛んでゐるのが目に見えるやうな。」と謳う。「あ、なつかしき故郷! お母さんは今頃何をしてゐなさるだらうか。家を出で、既に数年、思へばく我程の不孝者が世にあるるか……」と嘆くときの「私」の故郷は白雲ともにある。

童話「田舎と都会」(「教育研究」昭和五年六月)は、今頃は白い雲があるの広々とした故郷の平野のうえを漂つてゐると思ひ、故郷をなつかしむ少年の話である。未明は、「曾つては、里川に映る雲の影を無心に眺めた日もある」と言う。家に帰ると祖母が門に立つて未明の帰りを待つてゐる。外釜には湯が沸いていて、行水を使った思い出を語る。人生の生活に疲れ

たものにとつては、少年時代の夢を再び繰り返してみることができたら、それに勝る幸せはないという。

子供時代の思い出が白雲とともに想起される話は、他にも「夏雲の下の少女」(「少女世界」昭和二年九月)や「白壁のうち」(「コクミン二年生」昭和二年八月)がある。「白壁のうち」は戦後に書かれた童話である。未明の白雲は、終生、故郷に直結する象徴的な幸福の記号であった。

三、紅雲郷、赤い雲

未明は、十歳くらいの時分に見た日本海の入目を忘れることができなと述べている⁷⁾。真つ赤な太陽が沈んで、眩しい雲が空に飛び、自分の着物までが赤く染まったという。青空に浮かぶ白雲はなつかしい故郷や慕わしい母と結びついたが、西空に赤く輝く雲は、未明にとつてロマンチックな理想世界を想起させるものとして捉えられている。「紅雲郷」という言葉で示される場所がそれである。

「浄土」(「読売新聞」明治三十七年一〇月三〇日)は、大学時代の未明が強い影響を受けたラフカディオ・ハーンの死後に書かれた小説である。「遠い〜四千萬里の、見よ、夕陽に漬つて深紅の雲の漂うてゐる其の境が、即ち永劫に夏の楽園の浄土である。」とあるように、紅い雲、永劫に夏の楽園へハーンは行かれたと言う。その場所はハーンがかつて「慕ひ憧れてゐなされた、理想の都」であるという。そこが「紅雲郷」である。

タイトル自体が「紅雲郷」(「早稲田学報」明治三十八年一月〜三十九年一月)と名づけられた小説は、未明を文学者に導いた恩師である坪内逍遙によつてはじめて認められたものである。二〇年程前に某国の商船が難破し、生き残つた源吾は、島民に大事に育てられるが、故郷をおもう源吾の気持は抑えがたく、紅雲郷に故郷があると信じ、育て親の娘との幸せな結婚生活に別れを告げ、航海に出るといふ話である。

この他、「紅雲郷」の言葉が見いだされる小説には、「麗日」(「東京毎日

新聞」明治四一年四月〜六月)や「帰思」(初出不明、『緑髪』明治四〇年一二月、隆文館所収)がある。

四、凶雲、単調な雲、黄色い雲

「郷土と作家」(「新潮」明治四四年三月)の中で、未明は次のように述べている。

南方の暖かいところの風土が、自づからその作家を訓化して、南方的の作家を作るように、北方の陰鬱にして色彩の単調なる国土は、自づからその国の作家を感化して、北方的の作家を作る。作家はたゞ自分を生んでくれた自然に対して忠実であれば好い。

また次のようにも述べている。

北国の自然は、単調の底に力強い魅力を有してゐる。(中略)
もし、北方の文学に、南方の文学と異なつた力があり、特質があり、とすれば、それはその自然が、人間に与へた一種不思議な力であると言ひ得るのである。

北国の自然の中に表れる雲は、どのようなものである。先に紹介した詩「黄色な雲」のような黄色い雲は、北国らしい雲といえる。小説「北の冬」にも、黄色い雲が登場する。「私」は六つか七つの頃、炬燵にあつて、母からいろんな恐ろしい話を聞いた。赤い提灯が三つ、村へ入つてくるといったような話。日暮れ頃、母と一緒に湯屋へ出かけた。一面に灰色がかつた雪の原野。黄色な一筋の雲。日本海の波音が聞こえる。そこへ彼方から白装束の男がやってくる。光る鏡を胸にかけて。すれ違ふとき、男は「六根清浄」と言った。北欧詩人の北光を讚美した詩を読んだとき、そ

うした幼子の昔を懐かしく思いだしたという。結末に次のようにある。「黄色な雲——灰色の空——白衣の行者——波の音——眼に尚ほ残つてゐる其等の幻が私の心から去られぬので、いかにも神秘に感ぜられる。——多年都会生活に疲れた私の魂は北幾百里奇蹟の多い故郷にさ迷つた。」

黄色い雲は、未明文学にとって特徴的なものである。これに類したものに「黒い雲」があるが、こちらの方は不幸や死を暗示するさいの一般的象徴的表現となつてゐる。たとえば小説「暗愁」(「ハガキ文学」明治三九年七月)では、夫の不幸を暗示するものとして暗い雨雲が示され、小説「雲」(「学生」明治四三年五月)では、「私」の幼馴染裕圓の不幸が、「黒い雲」を通して表されている。「北国の夕暮れには、奇異な形の雲がでることがあるが、裕圓と見たときのような黒雲は再び見ることがなかった。」とあるような表現がその例にあたる。

五、行雲流水、無常の雲

小説「初恋」(「読売新聞」明治三八年一月二日、一月一七、二四、三九年一月七、一四日)は、ある村の娘が、写生に来ていた一人の若い絵師に恋をする話である。娘は高田城下の商家の養女となるが、祇園祭りの日に急逝する。「人生何処より来り、何処に行く。たゞさびしくも、さ迷ふ雲の如く、恋する者、嘆く者、憂ふるもの、傷むもの、げに碎けて落つる末は溪川の水に似たり。」ここに登場する雲は、無常の雲である。

「雲の姿」(「中央公論」明治三九年五月)は、広々とした武蔵野の景色を眺め、永劫の寂しみを感ずる小説である。昔から変わらぬ自然の姿と人の身の上を思い比べ、堪えられない寂しさを覚える。「自分は遠くに漂つてゐる白雲を眺めて、あゝ、人生は孤独である。自分は孤独であると思つた。あゝ、やはり彼の雲も孤独であるのだ！」人生のはかなさを自然の中で覚えた主人公は、人生は雲のように孤独であると考える。ここでの雲は、自然の側ではなく、人間の孤独の象徴として登場する。

小説「秋海棠」(「読売新聞」明治四五年・大正元年一〇月三日)は、折々に触れた心の印象がいつとなしに薄れて記憶から去ってしまうのを悲しく思うというところから始まる。夏が去っていく。雲が流れていく。「この世を去つて行く人の姿は、ちやうどあの雲のやうに静かである。人間の経験するさまの印象が記憶から忘れられて行くのはちやうどあの雲のやうにはなかいものである。」ラフカディオ・ハーンもこの雲のように世を去つたと言う。六つになる姉が伝染病にかかつて入院したが、時が経つと、子供の頭からそうした記憶も失われると思う。ここに登場する雲も無常の雲である。

小説「死の幻影」(「三田文学」大正二年一〇月)は、人は無差別の世界、無自覚の世界、茫漠とした世界に行くべき一筋の道を歩いていて、文明も社会も自然も無価値な幻影にすぎないという。自然は生物に喜怒哀楽を与へるが、最後にはすべてを奪つてしまふ。だから人には真の幸福も不幸もない。「みな大空を飛んで行く煙のやうな影に過ぎない。人生は水の流るゝやうにしばらくも、ある一つの場処に止つて、其の生活をいつまでも味はつてゐることがありません。常に流転してゐます。」と言うのである。ここでは「煙」の言葉を用いているから、「雲」と区別すべきであろうが、未明が人生の無常を強く感じていたことはこの小説からも強く感じられる。その他、未明は「漫々たる大空に、浮動する雲の如く、転た人生の流転を思はしめるものは夏である」¹⁰と、人生の流転を思わせるものとして、夏の漫々たる空に浮動する雲を挙げてゐる。また「すべての人は、死すべきものなり」と、いふことを、真に痛切に感ずるのは、大空に浮動する白雲を眺めたときであります。」とも述べてゐる¹¹。

私が子供の時分から、頭の中には、善い暮しをするのも、悪い暮らしをするのも、出世をするのも、又一生不遇で終つて了ふのも、畢竟それはその人の運であつて、如何ともすることの出来ない事だと云ふやうな思想があつて、どれ程私を陰鬱にさせたか知れない。¹²

未明には、宿命といった思いが子供時代からあつたようだ。人間の意志では変えられない人生の暗い道筋を思つたとき、雲に無常を見るようになったのであろう。

六、子供を思う雲

小説「くちなし」(「読売新聞」大正四年六月二七日)では、昔は雲をみると、桑畑の多い故郷を思つたが、今はそうではないと語っている。去年死んだ子供の面影が雲にありありと浮かんでくるというのである。死んで子供に会えるなら、すぐにでも死んでしまいたい、この世界以外に夢想する世界はない。だからいつまでもこの世界に生きて、紅い夕焼けのする夏を見ていたい、せめて子供が縁側を行ったり来たりしたときに暗い庭に咲いていた白いくちなしの花を求めたいという話である。

小説「三日間」(「新小説」大正四年九月)も、雲を見て、死んだ子供のことを思う話である。生は永遠の事実ではなく、死こそ永遠の姿である。そう思うと、貧困の生活も豪奢の生活も区別がない。宇宙のどこにも人間の訴えを聞く神はいないが、冷淡に運命を見下ろす神はある。自然は人間をもっと苦しめなければ、自然が存在することも、絶対が存在することにも思い至らないのだという。

未明の愛児哲文がわずか六歳で急逝したのは、大正三年一二月のことである。

七、訪れる雲、移動する雲

童話「山の上の木と雲の話」(「読売新聞」大正一一年三月二二(二五)日)の雲は、世の中に生まれてから、まだ何も見たことがない山の上の木に訪れる、忘れがたい訪問者として登場する。その雲は次のように五彩に輝く

雲である。

その雲は、実に美しい雲でした。にこやかに笑つてみました。体には、紅、紫、黄、金、銀、あらゆる眩しいほどの華やかな色彩で織られた着物を纏つてみました。神は、長く、黄金色の波のやうに捲き上つてみました。その雲は、おそらく大空の年若い女王でありましたでせう。

その色鮮やかな美しい雲は、木をなぐさめ、また面白い話をしにやってくると言つて別れるのであるが、夏がすぎ、秋になつても雲は戻つてこない。木は雪のなかでも雲を待ち続ける。寂しい北国に一人子として育つた未明は、さながら山の上の木のように、無聊を慰めてくれる何かの訪れを待ち望んだ。寂しい暮らしに、希望の光が射すことを願つた。この童話はそうした思いの形象化であらう。しかし面白い話をしにやってくると約束しながら、雲は戻つてこない。夏にならないと現われないのが北国の美しい雲である。

童話「町はづれの空地」(「教育行童話研究」昭和一二年一月)では、少年たちが松の木の下の空を眺め、松の木と雲が話をしているように思う。少年たちは人間にも「松の木のような人」と「雲のような人」があることを話し合う。このように木と雲は、対比される存在として未明文学にはしばしば登場する。

雲は登場しないが、「金魚売り」や「花と少年」「菓売」なども同様の童話である。さびしい少年を慰めてくれるものとして、外界から境界を越えてある人が訪れる。子供のころの未明はいわば木であり、それゆえ自由な雲に憧れた。

八、誘う雲、見守る雲

戦後に書かれた童話「雲と子守歌」(「新児童文化」昭和二年八月)は、

次のような話である。五つになる子が病気で苦しんでいる。たまたま平静なとき、青い空を見てると白い雲が「飛べるように、雲にしてあげるから、早くおいでよ」とやさしく誘ってくれるが、日が暮れると、どこかへ消えてしまう。母は子守歌を命のつづくかぎり唄おうと思うが、翌日の明け方、子供はこの世から去る。風が死んだ子供のために子守歌を唄った。

童話「ある毬の一生」（初出不明、『兄弟の山鳩』アテネ書院、大正一五年四月所収）は、毬が子供達から邪険に扱われるのを気の毒に思った雲が、毬を昼間の月にしてやるという話である。しかし、自分のことを心配してくれる子供達や、雲の上の世界の単調さを思い、毬はふたたび地上へ帰っていく。地上に帰った毬は、地上のものを美しく、うれしく思う。子供達から再び乱暴に扱われるようになって、黙っていた。毬はやがて年をとり、跳ね返る元気もなくなる。雲はもう一度、空の上へ連れて行ってやろうと誘うが、耳の遠くなった毬は返事をしなかった。雲は哀しそうに去っていったという話である。

雲は、月や太陽と異なり、地上に浮かぶものである。その優しさは人間的であり、それゆえ絶対的な力をもたない。病気の子の命を救うことはできないし、毬が昇っていった雲の世界は単調であった。優しさをもつが、大きな力をもつものではない。相手を優しく慰め、見守るものとして雲は登場する。

九、勇壮な雲、誓いの雲、金色の雲

童話「らっっぱのおと」（『コードモノクニ』昭和一七年七月）には、金色の雲が登場する。ラッパの音が勇ましく聞こえ、兵隊が近づいてくる。それは教練服を着た中学生達だった。少年の母親は目に涙をたたえ、少年と次のような会話をかわす。「みんな おくにを まもつて くださるに いさんたちですよ。」「だから、らっっぱは つよいの だね。」「町をでると、東の空に「きんいろの くも」がでていた。」「これから、まいばん あん

なくもが できます。せんちの へいたいさんが ごらんに なったら、さだめし おくにの ことを おもひだしなさるでせう。」「

童話「空にわく金色の雲」（『こどものせかい』昭和二八年六月）も同様である。母と子の家庭で育つ正吉は、苦勞して自分を育ててくれる母のためにどんな困難もいとわないと心に誓う。正吉は自分ひとりの力でやっていこうと思ひ、わきあがる雲を見上げる。足に怪我をした正吉は、それが悪化し、手術をしなければならなくなるが、子供をつれた女乞食に母が施しをしたことで、正吉の足に効く薬をもらう。正吉の足は数日後に治った。正吉は原っぱで空を見上げる。金色の雲には母が、別の雲には女乞食がのっていたという話である。

前者の童話は戦争中に書かれた。戦う兵隊やこれから兵隊になる中学生達を鼓舞するものとして、勇ましい金色の雲が登場する。後者の童話では母に対する孝養のつよい決意と母の慈愛が「金色の雲」によって示されている。

十、まとめ

小説「緑色の線路」（『早稲田文学』大正三年一〇月）では、主人公が目をつらわせるものがない曠野を思い、そこに気ままに浮かぶ雲のことを思う場面がある。

常吉は曠野を思つた。其処には眼を煩はせるやうなさまざまの物質がない、子供の時分から自分に親しい自然があるばかりだ。草は思ふまゝ、に伸びて繁つてゐるし、木は自由に風に吹かれて叫んでゐる。雲は氣儘に乱れて空を飛んで行く。其処には階級もなければ、また貧富の差別もない。ただ其処には永遠の自然と生死慌だしき人生との分ちがあるばかりである。

ここでは雲の様子をとおして、階級もなければ、貧富の差もない社会を思い描いている。そのことを思い、常吉は食べるだけの生活より、虐げられた弱者のために、人生のために働きたいと考える。

地上の人間の生活の不平等さに対し、「緑色の線路」の雲は平等なもの象徴として登場する。階級もなければ、貧富の差もないのが空の雲だという捉えである。この雲は、詩碑の雲の意味に近い。平等への憧れ、自由の追究、相互扶助の社会の実現といった思いそのものが、雲の様子から思い描かれ、そうした世界を実現するために「雲の如く 高く」「くものごとく かがやき」「雲のごとく とらわれず」ありたいと未明は願ったのである。

しかしながら、悠然として浮かび、とどまることを知らない雲の自由さ無心さが、人間の生き方として詩碑のように表される例は、意外と少ない。童話「松風の音」（「小学五年生」昭和一五年四月）では、一緒に摘草をしている子供たちが、コバルト色の空、ミルクのような白い雲、松風の音を聞く。いつのまにか雲は消えている。小さな水溜りに、はてしない大空が映っている。このとき少年は、「たゞもう自然の美しいのと、大きいのに泣きたくなりました。」とある。少年は、なぜ泣きたくなったのか。雲の自由さ無心さに自分を重ねるのではなく、自然の大きさ美しさに感嘆し、どうしようもない感動から泣きたくなったというのだろう。この思いは、未明文学の場合、それを見ている人間の、雲のように自由ではありえない、自然のように永遠でありえない意識へとその回路がつながっている。「雲、雲、イロイロナ雲」も「火雲の乱舞を見る」の扇面にも、同様の意識が背後にある。

小川未明文学に登場する雲の数量的分布の調査は、後の考察に委ねるが、全体的にいえば、未明文学においては無常の雲が小説において多く登場する。未明は、子供時代に雲に憧れ、同時に人間の限界を知り、人生の有限性をかみしめながら、暗い北国を小説に描き、それでも理想世界の到来を願っていた。その願いの形象化の一つが雲によって表された。

随想「銀河に従ひ」（「読売新聞」大正六年八月一七（二九日））で未明は次のように言う。

私を常に沈鬱に導くのは自然である。私を常に勇気付けて、孤独に堪えしめ、奮闘せしめるのもまた自然である。

この捉え方は未明の雲を考えると重要である。雲は人生の無常を感じさせるものであると同時に、人生の無常からくる寂寥を癒すものでもある。人間の理想的な形態を雲に見た子供時代の未明は、そのときすでに理想と現実の越えがたい距離を胸に覚えていた。無常ともいえる生き物としての人間の有限性、死すべきものとしての人間の限界を思いつつ、近代社会の資本主義がもたらす貧富の格差に怒りを覚え、平等で人々が互いに助け合う理想世界に近づこうとした。理想と現実の両極を往還するためには、自然から勇気を得、孤独に堪えることが必要であった。

雲に理想を抱き、一方で人間の実相を見た生涯が、未明の一生であった。未明は夢を遠くにあるものとしなくて、それを一生かけて招き寄せようとした。未明文学の原点は、子供時代の高田にある。高田で見た自然や人の暮らしから考えたこと、感動したことが、未明の胸のなかで生き続けた。それが核となり、ぶれることなく、未明の生涯を貫いた。その思いをもって、変貌する近代社会と正対し、その敵と戦った。

最後に、未明が雲の哲学といったものを開陳した「常に自然は語る」（「矛盾」昭和四年一〇月）の一節を引いて本稿を閉じることにした。

天心に湧く雲程、不思議なものはない。

自分は雲を見るのが、大好きだ。そして、それは、独り私ばかりでなく、誰でも感ずることであらうが、いまだ曾て、雲の形態について、何人も、これをあらかじめ知り得るものがないといふことだ。（中略）そのはじめに於て、千変万化の行動に関して、吾人のはかり知ることを許さない

のが雲である。

神出鬼没の雲の動作ほど、美と不可知の力を蔵するものは他にあるまい。しかし、たゞ、それは、自然の意志の反映なのである。即ち、自然なるが故に、自由なのである。

(中略)

作家は、空想する自由を有してゐる。空想は、ちやうど雲のやうなものだ。はじめは、形の定らない、影のごときものであつた。しかし空想は、想像となり、創造は、思想にまで進展し、やがて、それは内部的な一切の衝動のあらはれとなつて、外面に向つて迫撃する。(中略)

こゝに、自由の生む、形態の面白さがあり、押へることのできない強さがあり、爆破があり、また喜びがあるのである。自然の条件に従つて、発生し、発酵するもの、みが、最も創意に富んだ形を未来に決定するのである。

未明は雲の出現を、空想の湧出の比喩として捉えている。雲は「美と不可知の力」をもち、「自然の意思の反映」であり、「自由」なものである。未明文学が「押さえることのできない強さ」をもつとすれば、それは雲のように「自然の意思の反映」をおのれの主張として展開したからであろう。未明文学の核心は、雲にこめられた未明の思いから探ることができるといふことができる。

付記 本稿は、小川未明文学館講座(平成二十七年二月六日(日)、高田図書館)

書館)における発表「小川未明の雲」をもとに作成した。

注

- 1 岡上鈴江『父小川未明』(新評論、一九七〇年五月、二〇四頁)
- 2 表記の仕方にも工夫が凝らされている。
- 3 『小川未明作品集第5巻』(講談社、一九五五年一月、四四四頁)
- 4 「総ゆる問題は自己の生活にあり」(『新潮』大正四年九月)
- 5 『新潮日本文学アルバム 小川未明』(新潮社、一九九六年三月、一〇三頁)
- 6 「故郷」(『早稲田文学』明治四四年六月)
- 7 「日本海の入日」(『新潮』大正七年八月)
- 8 「上京当時の回想」(『文章世界』大正三年五月)
- 9 「冬から春への北国と夢魔的魅力」(『芸術の暗示と恐怖』大正一三年七月、春秋社)
- 10 「芸術家の観たる『夏の女』」(『中央公論』大正三年七月)
- 11 「平野に題す」(『読売新聞』大正九年七月二六、二七日)
- 12 「人間愛と芸術、社会主義」(『野依雑誌』大正一二年二月)